

パーフェクト リバティー教団研究序説

沼 田 健 哉

一 は じ め に

パーフェクトリバティー教団は、略称PL教団とも言い、日本の代表的な新宗教団体の一つである。筆者は、同じひとのみち教団から発している、倫理研究所・実践倫理宏正会（朝起会）を研究の対象としてきたのであるがPL教団研究の必要性は痛感してき、「現代宗教への視角」の書評において鈴木宗憲氏によっても指摘されたのである。¹⁾ 筆者は、以前からPL教団に関する資料はある程度読んでいたが、本格的に研究を開始するにいたったのは、54年の4月からである。それから参与観察が継続されてきたのであるがなにぶんにも大教団であり、いまだその全容を把握しているとは、とても言えず、したがって以下の論述も序説の域を脱するものではないことを、まず記しておきたい。

ところでPL教団は、生長の家と同様に、大教団であるにもかかわらず、従来本格的な研究業績が、ほとんどないことをその特質の一つとしている。その理由はいろいろ考えられるが、一つには、教団側が調査にあまり協力的でないことがあげられるし、さらに研究対象としての困難さがあげられる。教義は、一見単純にみえるし、それに宗教らしからぬ宗教とよく言われるように、日常道徳を説いているのである。したがって、宗教社会学の研究対象としては、それほど、おもしろい成果をもたらさないかにみえるのである。

1) 日本社会学会「社会学評論」第29巻第4号1979年、77頁。

筆者が、当教団に関心をもった理由の一つとしては、同じひとのみち教団から発したのにもかかわらず、なぜに神をたてない修養団体と、神をたてる宗教団体が同時に発生したかが興味ひかれたことがあげられる。この双方を比較することにより、日本人の信仰の構造の分析に対して、なんらかの示唆がえられるのではないかと思われたのである。またもう一つの関心としてはよく戦前と戦後における、日本人の精神構造の連続と非連続が論議されるが当教団は、なんらかの教義の変更をしつつ、現代においても大教団の地位を保っているのである。したがって、ひとのみちとの相違点と類似点を分析することにより、前記の問題に対する示唆がえられるのではないかと思われたのである。P Lには、一種のモダニズムがあることは、多くの人によって指摘されているが、その本質とはいったいなんなのか、それは研究する価値のある課題であるように筆者には、考えられたのである。

以下においてはまず、P L教団の歴史と現状について記し、ついで教義に関する考察と、組織と活動について検討を試みた後に、若干の結論的考察をおこなうことにしたい。

二 歴 史 と 現 状

P L教団の公称の会員数は、昭和53年1月1日現在で、国内2646,000人。海外282,000人であり、²⁾ 戦前百万といわれたひとのみち教団と、ほぼ匹敵する教勢を示していると思われる。これは、同じく国家による大弾圧を受けた、戦前の大教団大本教が衰微しているのと対照的と言えよう。ところで、ひとのみち教団の弾圧の特性は、教団が天皇至上化を唱え、独自の神話をもたず、教育勅語の道徳を「ひとのみち」と称し、学校教育において空洞化した教育勅語を、補完する役割を果たしたにもかかわらず、弾圧された点にある。³⁾ この体験がP L教団の性格を大きく規定したと言える。栄養失調の体で出獄し

2) 清水・小野・森・荒井「〈新宗教の世界〉」大蔵出版1979年103頁。

3) 池田昭編「ひとのみち教団不敬事件関係資料集成」三一書房、1977年、2頁。

た現教祖、徳近は、これからの日本は、一切の封建制が除かれて、自由主義社会と変われることを予測し、皇室中心主義教義は通用しなくなると考えたうえに、米軍の取締まりを考慮して以下の如く述べたとされる。「まあ当分は宗教団体としてではなくて、思想団体として行った方が無難じゃないか。『永遠の自由』—世界人類永遠の平和と福祉のため—といったことを標榜して名前も英語か何か外国語にした方がよい⁴⁾。」そして、マックファーランドによれば、「最初、この新しい組織を、宗教運動としようか、文化活動にしようか、どちらとも決めかねていた。しかし、『新しい』宗教が広く社会に受けいられる明らかな事実がみられたので、PL教団は、宗教団体として発足した⁵⁾。」ダンス、パーティや、他の「近代的」な活動を後援することに対して、「植民地的」と評した者があった。「PL教団がそんな雰囲気であるとはのめかすことは、この教団が、近代性という皮相的で、安っぽくけばけばしい飾りを採択したことを指摘したことになる。しかし、反発を感じる人もいたが、この運動は、他の人々の心を魅了し、急速に発展していった⁶⁾。」

このような、ひとのみち教団からPL教団への変容は、多くの人によって論議されているが、高木宏夫は、ややシニカルに以下の如く記している。「天皇制宗教との妥協を重ねてきた各新興宗教の大教団は、いまや教理を『民主主義』時代に対応させて書きかえる必要に迫られた。……ひとのみち教団は、教育勅語を教理としていたため、敗戦後の新事態に教理を適応させることは他教団に比べてより困難であった。そこでこの教団は、急きょ国際的色彩に塗りかえて、ひとのみち教団をPL教団と改称し、お守りをアミュレット(amulet)とよぶなど植民地の雰囲気をただよわせている。また夫婦の愛・一夫一婦を強調して流行的な『民主主義』に歩調をあわせ、活け花や造型芸

4) 池田昭「御木徳近—PL教団—」新人物往来社、1971年、264頁。

5) H・N・マックファーランド「神々のラッシュアワー—日本の新宗教運動—」社会思想社1969年、175頁。

6) 「同書」176頁。

術を強調した。また大阪府下の羽曳野の原野にゴルフ場と本部を建設するなど、『時代の尖端』を切っている。⁷⁾」

久木幸男は、PLを最初に新しい転換に成功した教団としてとらえ、敗戦責任を弾圧を受けたために問われることのなかった有利さを生かし、古い教理は太陽崇拜だけを残してすっかり書きかえたとする。しかし装いは、スマートであるが、案外に古いものも残っており、衣しょうのぬぎかえと言われるような不徹底な面をもっている。「だが同時に、古いアマテラス神話と絶縁し、夫婦愛や女性の権利を強調するその教理には、やはり近代への志向があることを認めないわけにはいかない。PL教団にかぎらず、戦後発展した新興教団には、多かれ少なかれ古いものと新しいものとが、混りあっており、古さの中に新しいものが芽生え育っている⁸⁾。」とみなしている。教義の内容については後に分析の対象とするが、外見的な面でのモダニズムとは、いかなるものであろうか。ひとのみち時代は、神主の装束を思わせた儀式のさいのコスチュームは、どこことなくカトリックのものに似たものとなり、聖地の正殿や脇殿はギリシャの神殿に類似している。敷地のあちこちに、アバンギャルド風の彫刻がおかれている。布教もコンピューターを利用する「コンピューター布教部」があり、信者の相談に、コンピューターを使うべく、目下ソフトを開発中、本部でのオーケストラつきの豪華そのものの式典、日本一のバトン・チーム、高校野球の応援における華麗な人文字、8月1日に举行される教祖祭における世界一の花火、以上の如き現象を、外からみたかぎり、いわゆる宗教くさは、ほとんどないと考える者もいる。教団側でも、「既成の概念でわれわれの教えを、宗教ではないと批判されれば、別に宗教といってもらわなくていい⁹⁾」と言う場合もある。したがって、一見修養団体と

7) 高木宏夫「日本の新興宗教—大衆思想運動の歴史と論理—」岩波書店、1964年、61～62頁。

8) 久木幸男「日本の宗教・過去と現在—原始から第二次天皇制宗教まで」サイマル出版会、1971年、183頁。

9) 清水・小野・森・荒井「前掲書」112頁。

の差異は、それほどなく、戦前との断絶はきわめて大きいかにみうけられる。それが正確か否かは、以下において分析の対象とすることにする。

三 教 義

PL教団の教義を考察するにあたって、まず対象とすべきは、教団の「憲法」ともいうべきものとされ、現教祖が、昭和22年9月29日の早朝に神授かったとされる、PL処生訓21カ条である。それは以下の項目からなる。1. 人生は芸術である。2. 人の一生は自己表現である。3. 自己は神の表現である。4. 表現せざれば悩がある。5. 感情に走れば自己を失う。6. 自我無きところに汝がある。7. 一切は相對と在る。8. 日の如く明かに生きよ。9. 人は平等である。10. 自他を祝福せよ。11. 一切を神に依れ。12. 名に囚って道がある。13. 男性には男性の、女性には女性の道がある。14. 世界平和の為の一切である。15. 一切は鏡である。16. 一切は進歩発展する。17. 中心を把握せよ。18. 常に善悪の岐路に立つ。19. 悟る即立つ。20. 物心両全の境に生きよ。21. 真の自由に生きよ。

これは、人が社会生活をしていくために、必要な秩序を保つために制定された法律や規則を「人律」と呼ぶのに対し、「神律」と呼ばれ、宇宙の法則として、人間の幸、不幸を司る世界を開示するものとされる。「神律」は、宇宙の始めから、この世を支配する不変の法則であり、自然間の諸現象、および人間世界のあらゆる出来事を支配する法則とされる。そして人間の生活は、人間生活の自然法則である「神律」を守ることによってのみ、幸福に営まれることが可能となるとされる¹⁰⁾。

これらの21カ条の中で、中心となるのは第1条であり、あとの21カ条も全部この1カ条に包含され、1カ条1カ条が、つながっているとされる。ひとのみち教団時代の芸術の定義は、「人が世の為め、人の為めに対象（物象・事

10) 宗教法人パーフェクトリバティー教団文教部「美しい生活への道標2」10～11頁。

象)を通じて自己の個性をさながらに表現することである¹¹⁾。」とされているが、PL教団の場合も、ほぼ同じ意味で用いていると言える。それは、以下のPL宣言により明らかとなる。「人生は芸術である。人は芸術生活をするとき始めて人生の意義と妙味とを知ることが出来る。芸術生活とは何ぞや。各人がその個性を各自の職域に於て自由に表現することである。人の個性は私利私欲に捉れず自我を離れ客観の境地に住し、人類福祉の為の上に立たなければ高度に表現することが出来ない。我々は茲に自我を離れ極めて自然に極めて自由に自己の個性を表現し、併せてこの思想を人々に知らせめ植えつけ共に世界文化に貢献しようとするものである¹²⁾。」

PL処生訓は、ひとのみち教団の人訓21カ条と比較すると、天皇制国家色を一掃しているように見うけられるが、それはかなり意識的におこなわれたと推測される。この点に関しては、現教祖による、以下のPL処世訓8の解説を参照すれば明確になると思われる。「“日の如く明かに生きよ”なぜこういう処生訓がさがったのかと申しますと、いつかは人類によって太陽というものが解明される時代がくる。そのためにはどうしても処世訓の中に「日」についてうたっておかなければなるまい。ということを悟ったからであります。…そういう一切を包含するところの神、その神が太陽として宇宙に顕現しているのです。その太陽のおかげで自分というものも存在することができるのです。すなわち太陽(日)は神の顕現であり、神の顕現である「日」はまた神の表現である自分にとっての一つの故郷—生命—とでもいうべきであります。…旧教団時代の処世訓の中に「世の中に生きるものの元はみな水である。その元は日である」というのがありましたが、ほんとうはこれをそのまま現在の処世訓にいれてもよかったのです。…その意味は一口に言って、世の中の一切のものは水気と熱気によってできているということであり、水

11) 池田昭「御木徳近—PL教団—」新人物往来社、1971年、266頁。

12) 宗教法人パーフェクトリバティー教団「PL会員必携」4～5頁。

気のもとには太陽である、ということなのであります。ただこういうことを申しますと、現在の世の中では、人心をまどわすおそれもあるところから、私はこれを封じて、単に“日の如く明かに生きよ”としたのであります。……天照らすというのは太陽のことであり、日本には太陽を神として拝む思想が古代からありました。…ところが、ひとのみち教団当時、太陽が天照大神であると申されたことから、教祖さまは不敬罪に問われるようなことになったのです。…日本には昔から天之御中主大神と天照大神は一体である、という一つの神道思想があったようであります。…太陽については今後いろいろなことが明らかになり、太陽と人間の関係というようなことも科学的に解明される日がくるのではないかと思います。そういうことを悟って、私はここに“日の如く明かに生きよ”ということを経世訓にうたったのであります。その意味は、何度も申しましたように、太陽のように明々白々な境地で生きていけ、公明正大な境地で生きていけということであります。暗い生き方、不明朗なことは一切するなということであります。¹³⁾」以上の解説は、きわめて多くのことを語っているが、経世訓の制定者の基本的態度がうかがえると言える。

ついで、PL教団には、PL信仰生活心得なるものがあり、以下の21カ条より成っている。1.自分のすることと言うことに誠をこめ、心を行き届かして暮らします。2.人や物事や天候の不足などを思わず、自分の考えや仕事の足りないところを発見し、何事にも創意工夫の精神を忘れぬようにいたします。3.人や物事に感謝の心をもってくらします。4.人のためをはかり、みささげの心を忘れません。5.何人にも何事にもはらたてません。6.自分の考えにとらわれて強情ばりません。7.気ばかり急いだり、心配しすぎたり、物事や、自分の事を悲観したりいたしません。8.欲な心だしません。9.何事にもずるいこととなるような心だしません。10.夫婦はしんから仲良くしてくらします。

13) パーフェクトリバティー教団「PL経世訓解説」81～84頁。

11. 子供は神の子とて、世のため人のため役立つ人となるように育てます。また子供は親の鏡と悟り、感情の満足に走って情におぼれるような育て方はいたしません。12. 朝は気持ちよく起きます。13. 食べ物の不足思うたり、好ききらい、よりごのみ、食べ過ぎ飲み過ぎ、むだぐいとなることはいたしません。14. なまけ心はだしません。また仕事しながら、不足思うたり人の事を気にかけて不足思うたりいたしません。15. 何事にも度を過ごさぬようにいたします。16. 自慢の心や偉そうにしたがる心だしません。17. 人の気持ちを悪くするようなこと言いません。いたしません。18. 人を粗末にするような思いいたしません。19. 宝生する心を忘れません。20. 感謝新友を授かることに努めます。21. 神の恵み、おしえおやの恵みを忘れません。

このPL信仰生活心得は、「祖遂断神事が現われて以後(昭和34年6月)制定されたものであり、新しい会員が信仰をすすめてみおしえをいただくようになるまで、とりあえず各種のPL常識を教え、これを守って信仰の本道を身につけさせることを目的とする。21カ条からなるが、みおしえに出る内容がほとんど言いつくされており、これを守れば病気にもならず、みしらせをいただくこともほとんどなくなるばかりでなく、その人の持てる力を一段と発揮できるようになり、運命を開拓し幸福になれるもの¹⁴⁾」とされている。PLの信仰において一番肝心なことは、教えを実行する、すなわち信仰生活心得を守って暮らすという誠意である。そうすることがPLの信仰にはいる道とされる。PL信仰生活心得というものは、PLに入会したために、これだけ余分に気をつけていかねばならない、というようなものではなく、PLにはいっていろいろがいが、人間である以上は、気をつけていかなくてもは損をするものとされる。しかし実際には、守るつもりではあっても、完全にこれを守るとは、なかなか容易なことではない。守れない、守らないということになると、そこにみしらせが現われる。守るつもりで守りそこなった場

14) パーフェクトリバティー教団「PL用語辞典」212頁。

合のみしらせについては、特別におかげをいただく、祖遂断というみちがある。すなわち、守るつもりの人については、おしえおやが、神に対して責任を負ってくれるとされる。

ところで、みしらせ、みおしえとは、いかなる内容をもつ言葉であろうか。みしらせは、幽祖金田徳光によって発見された真理で、苦痛・災難・病気・けがなど本人が苦痛を感じるものをいうとされる¹⁵⁾。これは、人としての本来的なあり方とは逆の方向に、個人の思惟や行為がむかっていく時あらわれる現象で、その個人の自己表現の歪となっているところを是正しろという神意とされる。たとえば、人は空腹を感じなければ餓死し、寒さを感じなければ凍死する。このことは、苦痛は生命を保持していくためには絶対必要なことであることを示している。人間の一切の苦痛がみしらせであるということは、それらの苦痛が、人間の生の表現に直接関係をもつということである。この人間の本性が歪められたり、阻害されているときに人間は苦痛を感じる。それは、まことをあらわし損なっているからそうなるのである。すなわち、まことになり損っているところを改めて、間違いなく自分のまことをあらわしていく生活に切り換え、人本来の自己表現の喜びに生きていくチャンスを与えられたものとして、前向きにそれを受けとめていくことが大切である。

このように、みしらせは、倫理的な反省の契機をなしているものであるが倫理的な反省の道を示すのが、みおしえである。それは「みしらせが現われた場合、そのみしらせの原因となっている我の状態（多くの場合その人の心癖）を教えていただく神の言葉であり、PL独自のものである。したがってこのみおしえを実行することにより、我となっている状態を自覚し、これから脱却して再び完全に個性の現われる芸術生活を営むことができることとなり、みしらせは自然に解決し幸福がひらけてくるのである。…みおしえは過去・現在・未来を貫く大真理である。同時にみおしえには教神のまことがこ

15)「同書」250頁。

もっているのである。ゆえにこれを深く広くしかも徹底して守りぬけば、それが積極善となり、過去の罪事までも相殺していただき、なお将来の幸運をも授けていただくだけの功德があるのである。…みおしえを守る意義は、自己の真実に生きるためにあるのであって、単に病気が直したいためとか、問題を解決したいために守ることを強制されているもののようには取ってはいけない。…みおしえに指摘された我（癖）は、尋常一様の気持ちではとうてい取り去ることはできない。みおしえを守る境地は授けられるのである。一生懸命に信仰することによって神からみおしえを守らしていただく境地を授けてくださるのである。…みおしえの正しい守り方は、『そのまますっばりといただく』ことである。みおしえの文言をそのまま受けることである¹⁶⁾。」とされる。

みおしえの内容の基本は、前記の如く、信仰生活心得21カ条であるが、祐祖が第一感によって判定するもので、バリエーションはある。さらに21カ条とはまったく別のみおしえもあり、すべて画一的であるわけではない¹⁷⁾。みおしえをいただいたら、必ずみおしえの言葉どおりの心となり、そのとおり実行することを決意し、その場でそういう人になってしまえるよう、神にお願いし、3日間、それを続ける。その間、自分はどんな時、どのようにこの心ぐせが出てきたかをできる限り見つけ出し、その時自分はどうか改めたかを反省する。4日目にみしらせが解決するしないにかかわらず、教師に反省した点を話し、みおしえの言葉の意味、守り方、その他の疑問の点等について、解説をうける。みしらせが解決しないときは、解決するまで、何度も解説を受ける。またたとえみしらせが解決してもくり返し、解説を受けるべきである。なぜならば、もともとみおしえは、みしらせ解決のためではなく、よりよい個性表現のためにいただくからとされる。そしてみおしえは、みだりに他人にみせたり話したりすべきものではないとされる。

16) 「同書」246～247頁。

17) PL会員の言による。

ところで現教祖御木徳近は、おしえおやと呼ばれ、PL会員は、彼によって生活をするよう指導される。このおしえおやは、PL教団においては、以下のように位置づけられている。「おしえおやとは、世界全人類に対して、人の進むべき道を無限に説きあかされる真理のはけ口としての神業の椅子である。おしえおやなる神業は先代教祖によって世に残された神業であり、未来永劫に存続するものである。宗教というものは、その時代に生きる人たちの感覚にマッチするように解明されねば、人を救うことはできないものであるが、本教においては、いつの時代にもおしえおやなる神業があり、おしえおやによって、その時代々々に適合する教えを解明していくことができるのである。…この意味においておしえおやの公式の呼称は、初代教祖、二代教祖、三代教祖…となるのである。…現おしえおやは、先代教祖に絶対服従して道を得られ、先代教祖によりみおしえ法と身代りの神事を授けられ、天人合一の心境を授けられ、おしえおやの神業を譲り受けられたのである。…PL教団はおしえおやによって解明された教義を宣布する宗教である。おしえおやを抜きにしたPL教団はあり得ない。それはいわゆる封建的独裁といったものとは訳合いが違うものである。…したがってPLにおける一切はおしえおやの意図の中にあるべきなのである¹⁸⁾。」

PL教団において、おしえおやは、官職カリマスの担い手として絶大な権限をもっているといえるが、それは、身代りの神業が可能だからである。これは幽祖によって世に現わされた神事とされるが、身代わりが通ずるのは、おしえおやが神に対し身体を代償にして、昼夜を分かたぬ責任を負っているからとされる。教師あるいは会員が身代わりを願うと、教主（時に祐祖）の身体に、熱とか、たん、せき、わずかな苦痛とかいう形であらわれる。身代わりは、突発的なみしらせの場合に、みおしえをいただくまで、神に願って、身代わりの神業をあらわしめたまえと念ずるものといえる¹⁹⁾。

18) パーフェクトリバティー教団「PL用語辞典」38—39頁。

19) 「同書」248頁。

ところで、基本的には同じ概念に基づくものに、おやしきりの神事がある。これは、昭和33年5月29日に教主により新たに造型された神事で、おしえおやの全責任において決定した一切の物事を言う。具体的には、おやしきりの五字を唱えることにより、この身このままで、教神およびおしえおやの遂断から発せられる、一切のめぐみ、力をそのままいただくことができるとされる。このおやしきりを願う意味は、至らない点があるならば、今後の精進によって至るようにしますから、現在のみしらせ状態ないしは現在念願することを一時助けたまえ、恵みたまえということである。おやしきりを願うには、その条件として、終生PLの信念信仰をつらぬく決意と、PLの教えはいかなることでも守り行なうという決意があげられる。祖遂断によって布教は単純化され、まず現実の苦痛から脱却させ、その後に真理を悟らせることができるようになった²⁰⁾。信者は、みしらせが生じた場合には、まず祖遂断を願い、ついでみおしえを受けるケースが大部分なのである。

ところで、PLでは、神に依ることの大切さを説いているが、神とはいかなるものとして把握されているかを検討の課題とする。それは、絶対一であり、すべてを包含する一であり一つしかない一であるとされる。すなわち量的には自己を包含する無限大であり、その中の働き一切を包含する一である。神はすべてであり、限りのない全体を呼んで神というのであるから、別個なものや取り出せるようなものはない。神には働きがあり、自然現象、人為的現象がそれであり、神業と言われる。神業には法則があり、地球の自転とか進歩発展という方向性とかがそれであり、PL処世訓は、この法則の中から処世上関係の深いものを、選び出したものである。神は全体であるが人間も包含した全体である。神と人とは全体と一部という関係にある。したがって人が独立した存在と思うのは錯覚である。自我とはこの切り離すことのできない全体（神）から、人（部分）が離れて存在し得ると錯覚している心境を

20)「同書」43—44頁。

言う。いろいろと感情に走る結果が生じるのは、自我に立っているからである。大海の水を神とし、この水を一滴取り出してこれを人と考えると、両者は量や形においては非常な差があるが、質においては同じ水である。同様に神と人とは、量や形に差はあれ本質においては同質である。しかし人はあくまで人であって神ではない。しかし同質であるから、自分がいかなるものか、人間がいかなるものかが悟れば、神が悟れるのである。そしたら神と交流ができ天人合一の境地、神に依る境地にたてる。神業は常に建設へ進歩へという方向性をもっているが、それは言いかえると一切を育て大きくするということでもある。一切は神のお恵みであり、したがって感謝することしか人生にはないことになる。人間のこの気持ちは神に対し神を尊ぶ心となる。神は絶対平等公平であり、心も物もともに包含した全体である。人は常に神に依ろうとする本能があり、それが信仰心のもととなる。偉大なるもの、神秘的なものに出合った時の驚きは、神に依ろうとする本能の現われである。神の一部として顕現している点で、森羅万象ことごとく同じであるが、人間と他のものとの違いは、人は芸術するものとして顕現しているのに対し、他は、ただかくあらわしめられているにすぎず、芸術できない点にある。人間が芸術する場合に、させてもらおうとするとが同時にある。人間が生かされて生きているという表現をするのもそれが故とされる²¹⁾。

それでは、PLにおいて死とはいかなるものと考えられているかという以下のようにある。人間の死後はどうなるかという、それは、大海原へ一滴を落とすと、その一滴の水はなくなったのではないが、海全体へとけこんでしまって、どこにあるかわからなくなってしまう、と同様に溶けこんでしまうのである。したがって、生命を失っても人は、永遠に不滅だともいえる。全体なるものから現出し、全体なるものへ帰っていくのであるから、われわれのすべてが滅びさるわけではない。このような循環をくり返しつつ進歩発

21) 「同書」58—61頁。

展しているのである。そして一番問題なのは現在なのである。現在ほど尊いものはない。われわれはひたすら現在を凝視し、刻々を究明して、神慮にそう芸術生活をしていくよう努力しなければならない²²⁾。

このようにみると、PLは、はっきりした現世主義の立場にたっているといえるが、しかし、信者が安置し礼拝の対象とする教徒 神霊には、大元霊（みおやおおかみ）と教神（幽祖ならびに先代教祖）の御神霊、それからその家の祖霊（亡くなられた人々の神霊）がこめられている。これに対し、朝に夕に以下の如き、拝詞（おがみことば）による礼拝がなされるのである。「朝の拝詞、大元霊並びに何某の家（諸々の家）累代祖霊の御前に何某（一同）謹んで申し上げます。今日の一日を神の子として我欲に捉われず、自己の個性を現わす芸術生活に生きますに依り、広大無辺き神の栄光を垂れ賜わん事を祈願い致します²³⁾。」「夕の拝詞、大元霊並びに何某の家（諸々の家）累代祖霊の御前に何某（一同）謹んで申し上げます。今日の一日を霊妙き神業の随に生活させ賜わりし御恵を厚く感謝申し上げます²⁴⁾。」

このようにPLは祖先崇拜もとり入れており、思想的根拠としては、祖孫一心なる用語があるが、これは、家の流れという場合もある。祖孫一心とは先祖と子孫の心は一つで、切り離すことのできないものであるということである。先祖がよい行いをし、よい心づかいをしていれば、その結果は子孫に必ずあらわれる。先祖が誠をしておれば子孫は幸福に恵まれ、反対の場合は子孫に不幸があらわれる。先祖のよい点はこれをのばし、至らざる点は、これを是正し、積極善をつみ、大いなる徳を子孫にのこすようにしなければならない。先祖より受けつくだまことより、より大きなまことをして、子孫に伝えなければ生存の意義がない。先祖のまことならざる行ないには、なり代わってお詫びし、そうしたことは今後せぬよう誓い努力しなければならない。

22) 「同書」105頁。

23) 宗教法人パーフェクトリバティー教団「PL会員必携」16頁。

24) 「同書」17頁。

そのことにより同時に子孫を改めることにもなる²⁵⁾。したがってやはり現世主義は貫ぬかれていると言える。ところでPL教団の特色として、日常道徳を説くことがあげられるが、とくに、PL諸心得なるものがある。それはお産の心得・受験心得・結婚誓詞・運転者心得・セールスマン心得・保険外交員心得・助産婦心得・看護婦（人）ならびに付添心得・語学修得の心得・写真撮影者（プロ）心得・生花指導者心得・茶道指導者心得・商業者心得・農業者心得・音楽専攻者心得・教育者心得等となっているが、この中で、商業者心得をみることにする。

「PL商業者心得」1. 商売は自分の利欲のためにするのではなく世のため人のため自分の誠を献げるべきものであることを悟る。1. 夫婦はしんから仲良くしてくらす。1. 商売は夫(婦)だけであるのではなく、夫婦一体となっはじめてできるものであることを悟る。1. 薄利多売を旨とする。1. 顧客本位に便宜を計るようにする。1. 客には親切ていねいにあいそ良くし、差別待遇や好ききらいなどぜったいせぬようにする。1. 商品の仕入れは、自分の利を先にするようなことせず、顧客を本位としてするように心がける。1. 常に扱い品目の研究調査等を怠らず、また購買層の需要の研究、時代の進歩に対する注意観察等もおろそかにせぬようにする。1. 店舗を愛し、装飾陳列を注意し商品を大切に扱いつねに清潔にし明るく感じよくすることを心がける。1. 他の店舗の業態や場所などをうらやんだり排斥したりせず、喜んでこれを学び研究するようにする。1. 組合等の規則、規約あるいは値段の協定などは厳守する。1. 儲けにつきすぎて近欲となる心を出さぬようにする。1. 貪乏心を去る。1. 妥協となる心を出さぬようにする。1. なまけ心出さず神のご用をさせていただくと思うて喜んで立ち働く。1. 集金をいやがったりおっくうがったりせぬ。1. 主人を中心として働いている人たちの心を常に一致するように努力を怠らぬ。1. 従業員に対する理解を行き届かし真の親切をもって対し待

25) パーフェクトリバティー教団「PL用語辞典」171—172頁。

遇その他従業員が希望を持ち喜んで働けるようにすることを心がける。1. 朝詣その他信仰行事にはつとめて参加するとともに、すすんで解説を受けていくようにする。1. 宝生精神を忘れぬようにする。1. 商売不振になってもみしらせと悟って喜んで主人夫婦および従業員の心、行ないの誤りが根本原因なることを自覚して善処するようにする²⁶⁾。

これをみると、技術的なものの比重は少なく、商売をしていくうえでの心構えといった内容であることがわかる。信仰による商売の大切さが説かれ、信仰していながら、商売がつどうよくいかないというのは、道を聞いてもそれを実行しないからとされる。

ところでPLはひとのみち教団以来、都市の商人をその主たる担い手の一つとしてきただけあって、物や金を自由に使いこなすことの大切さを説く。以下はおしえおやが、この点について述べた言葉である。「人生は芸術である。芸術は各人が各様の自己表現をすることである。自己表現をするには、『物』がなくてはできぬ。物と自己とはつねに一体となって顕現される。人の個性を『物』に息吹して、はじめて芸術となるのである²⁷⁾。」「物あつての人生である、物こそ自他祝福の鍵である。物を欲しがらる気持ちがただちに『我』であるというのではない。物に対する『我執』をいましめたいのである。物に対する正しい認識（悟）が必要なのである。」²⁸⁾「金や物は、人間の表現の素材であって、それ自体に価値はない。表現の『必要度』に応じて価値を生ずる。一片のガラスのかけらでも、それを必要とする芸術には、ダイヤモンドよりもすぐれた価値を持つ場合がありうる。物そのものに執着して、怒り、急ぎ、憂え、悲しむの感情に走るのは、価値のないものに振り回されていることになる²⁹⁾。」「金や物を出ししぶったり、しまい込んだり、死蔵した

26) 「同書」128—130頁。

27) 宗教法人パーフェクトリバティー教団文教部「美しい生活への道標2」18頁。

28) 「同書」同頁。

29) 「同書」18—19頁。

りすると、金や物がスムーズに授からないばかりか、不幸の原因ともなる。出すべき金や物は、進んで喜んで出そう。それが、必要な時に必要な金や物が授かる道である³⁰⁾。」

すなわち、人生を心豊かにおくるには、物や金を、自由に使いこなせることが必要であるとされ、「悟加富」と呼ばれる、五年間 無利子 で教団に金を預ける制度も、おしえおやの神事とされる。「悟加富」に参加すると、一切の不幸のもとである物質欲・金銭欲が克服され、経済に対するスケールが大きくなるとされる。金に対するスケールとは、惜しみなく自由にどれだけの金額を使うことができるかによって定まり、物や金を授かるのも、その人のスケールの大きさによるとされる。また「悟加富」に参加すると家の流れも清められ、子孫に徳を残すことができるとされる³¹⁾。

以上みてきたように、PLの教義は、処生上の知恵という側面が強いことはたしかであるが、それにとどまっているという断定はさけたいと思う。日常的道德としては、目上目下のけじめをはっきりすることが教えられ、夫婦の間でも、まず夫を立てることが妻のつとめであると教えられる。したがって、人間は平等であるといっても無限定のものでない点に注意する必要があると言える。つながりを大切にすることから、親孝行の重要性も説かれ、おしえおやの権威には、服従しなければならないとされる。神といっても超越的な人格神ではなく、とらえ所のない概念である。したがって具体的な心のより所としては、おしえおやがその対象とされるのである。神は全智全能の存在ではなく、それだけ、人間の主体性の働く余地が大きいと言えよう。

四 組織と活動

PLの組織は、大きくわけて、「タテ」と「ヨコ」の系列がある。「タテ」

30) 「同書」19頁。

31) 「同書」18—19頁。

は、入会のさいの人的なつながりを中心とした系列によるもので、大本庁—教区—ブロッカー教会（布教所・支所）—支部—団—班となっている。各班は5～10人の会員で組織され、5～10班で団と支部が形成される。この布教組織は、各教会ごとに所属しており、会員は、教会内では、支部、団、班の別なく自由に交流できる。教会には専任教師が常駐して指導に当たる。教会は一あるいは二県ごとにブロックを作り、二ブロックないし三ブロックごとに教区を形成している。昭和53年1月1日現在、国内の教区12（43ブロック）、国外の教区4（12ブロック）。国内の教会数は321、海外の教会数は109とされる。各組織には、班長・団長・支部長があり、会員のなかから任命される。教会長、ブロック指導部長は、専任教師が大本庁から派遣される。

「ヨコ」の系列は、会員の分布を地域ごとにまとめたもので、管区—方面—総区—地区—区—組よりなり、座談会を中心とした、会員の相互親睦、心境向上等の活動の単位となっている³²⁾。教会における会員の組織としては、年齢や性別に応じて、55才以上の男性からなる円心会・30～55才までの男性からなる壮年会、既婚の女性・結婚経験のある婦人および女子部に属していない婦人からなる婦人会、70才以上の男女からなる老春会、さらに青年部がある。青年部は、男子部（16才から29才までの男性）、女子部（16才～26才までの女性）、に分かれ、学生は別に学生部（大学生）・高等部・中等部・少年部（小学生）という組織を作っている。これらの組織の日常活動は教会単位に行われるが、全国組織としての全国連盟を結成し、相互に連携し、全国的な活動ができる体制をとっている。それぞれの会は、会員相互の親睦のための行事や、各種の講座を開いている³³⁾。新宗教団体の常として、教主を中心とする教団幹部は、青年部活動を重視し、以下の如き、基本理念を示している。「PL青年訓—PLの目的とするところは、芸術すなわち人間表現

32) 「同書」30頁。

33) 「同書」31頁。

を解明体得し、新しい文化文明を創造するにある。人間表現の個における態は、人間力の造成開発、すなわち人間としての度を高めることに向けられねばならぬ。P L 青年は、個としての人間表現を集団に高揚し、社会全体の文化精神にまで昇華作用せしめ、新しい文化の開花をもたらして、有史以来人類が果たし得なかった大平和の夢と理想とを、われらの情熱と団結によって果たすのである³⁴⁾。」「P L 青年実践綱領—1.われらは、芸術生活の感激に生きる。1.われらは、自他を祝福する。1.われらは、誠実・機敏・闘志に徹する。1.われらは、高き気品を持する。1.われらは、世界平和のパイオニアである³⁵⁾。」これらの基本理念を具体化するために、青年部では、教学座談会・定例部会・訪問指導・地区大会などの諸活動を行なっている。個人の人間力開発の面では、それぞれの立場に応じた道を指導するための、「能力開発セミナー」「青年講座」「受験指導会」「勉強会」「女性教室」「茶道教室」「華道教室」などのセミナーや講演会などが開かれるとともに個人指導もいつでも受けられるようになっている。また年二回の各部毎の聖地錬成・ボランティア活動・チャリティショー・美化献身・募金活動・各種クラブ活動なども行なわれている³⁶⁾。

ところで、P L の教団組織の頂点は、いうまでもなく教祖であるが、その下に、約百名の教師の中の重役というべき祐祖がいる。祐祖は、心境の順位により、教祖により任命されるとされているが、その職務上の特権は、教主に代わって、みおしえの取りつぎができる点にある。P L の全組織は、教祖を中心とし、焦点としているが、それは、教祖が天人合一の境地に立ち、いわば神と人間の媒介者として君臨しているからである。³⁷⁾ 教師らは、その弟

34) 「同書」32頁。

35) 「同書」同頁。

36) 「同書」同頁。

37) 対馬・西山・島蘭・白水「日本の新宗教における生命主義的救済観—近代の宗教意識の一側面」C I S R 東京会議組織委員会『C I S R 東京会議紀要』1979年参照のこと。

子であり、信者は、教師を通じてやはり、教祖の間接の弟子なのである。教師は、所属の教会を、ほぼ5年を年期として変更させられる場合が多く、したがって自己の持ち物は、コウリ一つに入る物しかないと言われている³⁸⁾。したがって中央集権制が徹底しており、分派が生じる可能性は少ないと言える。

この教師を補佐する在俗の信者が補教師と呼ばれる者である。現在補教師になるための条件は、3人信芸（3人をPLの信者にし、その世話をする）を誓い、1年が期限となっている補教師講習会に参加することの2つである。補教師の職権としては、おやしきりを行なうことと、みおしえ願いの受付けがあげられる。常任補教師以外は、無償であるが、献身をとおして、教団の発展につくすと共に、自分自身も救われるとされる。補教師を拝命したら、「補教師心得」を受け、おしえおやと電流の通った状態で会員の指導に当たらなければならないとされる。すなわち、教師とつながって、事ある毎に報告し、解説を受けることを忘れてはならないとされる³⁹⁾。以上から、PL教団は、教祖—祐祖—教師—常任補教師—補教師—一般信者というタテの線が、教祖にすべてつらなっているという構成をとっており、中央集権の進んだ、リジッドな組織を有していると言える。

PLの儀礼としては、まず4大祭があげられる。それは、元旦祭、教主誕生祭、初代教祖祭、PL祭よりなり、祭日には、大本庁および各地の教会において大祭が執行される。

まず元旦祭は、一月一日に行なわれ、その年を充実した幸福の年とするため、自分の決意を神に誓い、さらに教神と祖霊の加護を祈る式典が執行される。教主誕生祭は、4月8日に、教主の誕生日を祝する式典として行なわれる。教主は同日、御木家誕生祖霊祭を行なう。したがって、教主誕生祭は教

38) これは、ひとのみち教団来の伝統である。

39) 宗教法人パーフェクトリバティー教団文教部編「補教師必携」1976年、24頁。

団の公の祭であるとともに、御木家の私の祭という性格も持っている。教主は、各教会の会員幹部を招集して、誕生祖霊祭を共に祝ってもらうことにしている。教祖年祭は8月1日に、初代教祖御木徳一の霊に感謝を捧げ、その徳を顕彰し、今後の教団の上に神霊の加護を願う式典として行なわれる。この教祖年祭は、世界一と言われる「PL 花火芸術」で有名である。また同日午後4時から、超宗派万国戦争犠牲者慰霊大平和祈念塔の年祭が行なわれ、戦争の犠牲となった人々の慰霊の式典がとりおこなわれる。その時間には、聖地に参集している全員が1分間の黙禱を捧げる。PL 祭は9月29日で、PL 立教記念日の式典である。これは若者の祭典で、大本庁および全国の各教会で「青年の祭り」が行なわれる⁴⁰⁾。

ところで、一般信者にとってより重要なものとして、1の日詣りがある。PL では毎月の1日を平和の日、11日を先祖の日、21日を感謝の日として、それぞれの教会で式典を行なっている。平和の日は、神の恵みを感謝し、世界平和を祈念する日とされる。日常生活の中で忘れがちな、世界平和という人類の悲願を再認識し、世界平和に貢献する決意を神に誓う式典である。先祖の日は、祖孫一心の原理によりこの世に生きている自分であることを認識し、自己表現の上に先祖の遺した徳が働くよう、先祖の神霊に願い、感謝を捧げる式典とされる。感謝祭は、PL の一番大切な式典で、大本庁をはじめ全国の教会で一斉に行なわれる。この日は、教主は1ヶ月間に自分の身にひきうけた身代りの責任を神に返し、改めて今後1ヶ月間の遂断をたてる。PL 会員は、この教主の遂断によって、いつも守られていることを感謝し、感謝の誠を捧げる式典を行なうが、これが感謝祭の性格である⁴¹⁾。これらの教会における式典においては、まず教会長と信者の代表よりなるグループが祭司として前に出て遂断り、式典が行なわれるが、その際全員により PL

40) 宗教法人パーフェクトリバティー教団文教部「美しい生活への道標2」34—36頁。

41) 「同書」36頁。

遂断詞がとなえられる。その後信者の体験談があり、ついで教会長の教話がある。その内容は、教祖の「日訓」から引用する場合が多いが、他に月の集中点や、PLの新聞の記事を題材にすることもある。教話の内容は、きわめて分かりやすく具体的なものであり、信者の日常生活を営むうえに指針となるものといえる。それが終わった後に、終りの遂断が行なわれ、式典は終了するが、その後に会食が行なわれることもある。

その他のPLが行なう式典として個人の式典がある。その内容は、結婚式・誕生祖霊祭・愛児生誕感謝祭・鎮座式（遷座式）・銀婚式・金婚式・成人式・葬式等が代表的なものであるが、他に地鎮祭・上棟式・落成式・播種祭・植樹祭・七五三祝・還暦祝などの式典をして神の加護を願う。このうち鎮座式とは、教主が神霊籠めした教徒神霊（大元霊、教神それにその家の祖霊が籠められている）・商店神霊・工場神霊などを、自宅あるいはお店、工場に迎える式典であり、転宅、移転した場合に行なう式典が遷座式である⁴²⁾。これらの式典の多くは、ほぼ神道のそれと類似した形式をとっており、PLの性格規定に一つの示唆を与えるものと思われる。

なお朝まいりは現在行なっていない教会の方が多いが、筆者が参与観察を行なっている教会においては、6時半より行なっている。ここにおいても体験談の発表と教会長による教話が中心となり、教義を身につけさせる場となっている。参加者は少数であり、日曜日は、総朝まいりの日とされ、食事もでる慣習となっている⁴³⁾。

PLの教義の中心は、みしらせ、みおしえであるが、教師の一番の任務はみおしえの解説と、信者の種々の相談に応ずる一種のカウンセリングである。カウンセリングといっても、PLの教義にそった性格のものであるが、信者

42) 「同書」37頁。

43) かつてはどの教会でもやっていたが、テレビの普及等による時間帯のずれに対応して、やっている教会は少なくなった。時代に対応した布教方法をとるのがPLの特質の一つである。

はあらゆる相談をもちかけてくるのであり、それに答えるのが教師の責務なのである。信者にとっても教会は、よろず相談をもちかけ、解決を期待する場として把握されていると言える。

PL の財政は月額500円の会費外には、「宝生」と呼ばれる献金制度によっている。入会した信者に対しては、PL 信仰生活心得・PL 会員必携・PL ガイドブック、さらに礼拝の対象としての「新友神霊」と共に、宝生袋が渡される。宝生袋は献金を入れるもので、各自の分に依じて、なにか感謝することがあるとき、特別の願いごとがあるとき、自分の誠をこめた金を入れるとされ額は決まっていない。これらの金はすべて大本庁に送られ教団の財政的基盤となり、教師への給料は、大本庁から送られる。これ以外に、悟加富と呼ばれる5年間無利子で教団に金を貸す制度があり、それへの参加が強力に呼びかけられる。さらに、それぞれの教会の維持費は、月1万円の特別奉仕員と5,000円の正奉仕員、2,000～3,000円の準奉仕員による献金によって維持されている。いずれにしろ、PL 教団は、会員に対し、種々の献金を呼びかける傾向の強い教団の一つとして位置づけられるようである。

ところで PL は、多くの文化活動を行っており、狭い意味での芸術をも奨励していると言える⁴⁴⁾。まず、日本での伝統芸術の一つである茶の湯の作法に、PL 理念を織りこんだとされる、PL 茶道や、生け花を通して神に依る人生芸術の奥義を悟ることを目的とする PL 華道がある。さらに世界一と言われる、PL 花火芸術は、広く知られ親しまれている。各流派の日本舞踊を研究し、バレエレッスンもとり入れた PL 舞踊研究所があり、立派な平和人を育成するための幼児教育を目指して設立された、ピーエル子供劇場(カップ座)は、国内のみではなく、海外でも公演を行なっている。PL 陶芸部では羽曳野焼を生み出し、陶芸館も開設されている。PL は出版活動も盛んであり、主な機関紙誌としては、「芸生新聞」(週刊) 雑誌「PL」(以

44) 湯浅竜起編「PL 30年史」芸術生活社1977年76—97頁。

下月刊)「自己表現」(青年部機関誌)「PL ジュニア」(中等部機関誌), 短歌誌「短歌芸術」・詩誌「詩芸術」・総合芸術誌「芸術生活」がある。これらのいずれも、普通の意味での宗教色は少なく、とくに、「芸術生活」誌は、PL 色もまったくない、芸術総合雑誌である。「短歌芸術」誌は、教主が主宰する短歌総合誌で、現在会員は5000人であるが、教師は、心境向上のため、全員が短歌をつくることが課せられており、特別な使命をもった雑誌とすることができる。なお出版活動を行なうために、株式会社芸術生活社が設置されている。

他に PLMBA (PL マーチングバンド連盟) があり6,000人をこす会員を擁し、日本一のバトンチームとされている。又 PL は、PL カントリー倶楽部 (ゴルフ場)、PL ランド (遊園地) をも設備しているが、さらに、幼稚園から短大までもつ PL 学園がある。

PL の科学は、宗教と科学の一致を目指すという趣旨のもとに、PL 医学部・PL 病院・PL生命科学研究室・BCM (コンピューター布教部)・健康管理センター・PL 植物研究所等が設立されている⁴⁵⁾。PL の医学とのかかわりあいには、病気が人間の精神状態や感情生活と深い関係をもっているという宗教的信念を、医学的に実証することを目的とするものとされる。コンピューター布教部は、みおしえの統計処理にコンピューターが使えるかどうかを検討するために設立された。現在までにおいては、みおしえは、個人に下附されるもので、個人個人の特殊性に応じるというのが、たてまえであるため、まだ十分な成果をあげるにはいたっていないが、個人正常値の発見などの成果もあげている。PL 健康管理センターは、コンピューターと自動検診機器とを直結し、メンバーの健康管理をしようというもので、人間ドックの検査項目のすべてをわずか3時間ですませるとされる。ここでは、個人正常値の発見につづき、胃癌の発見率日本一の成果をあげた。

45)「同書」98—105頁。

以上の多岐にわたる、PL の文化活動は、ひろく知られており、PL 教団は、宗教団体であるよりは、文化団体であるというイメージで、一般の人々に受止められている場合が多いと言えよう。これがいかなる意味をもつかは後に考察の対象としたいと思う。

五 若干の結論と展望

当章においては、まず最初に、同じひとのみち教団から宗教団体と修養団体が同時発生した要因を分析したい。PL の教義をみると、ひとのみちの教義のうち、天皇制国家体制に関連した部分を注意深くとり除いていることが分かる。歴史的にみると、弾圧の体験が決定的に重要であり、いかにしたら再び弾圧を受けないですむかが、教団の幹部にとっては最大の関心事であったと言える。したがって、思想団体の形態をとるか、宗教団体の形態をとるかは、ある意味では、内的必然性というより、政策的なものであったと言える。ひとのみちから発している倫理研究所、実践倫理宏正会という修養団体があるが、これらが修養団体という形態をとるにいたったのも、PL と同様に、かなり政策的な色彩が強いと言える。しかし、いかに政策的に指向したにしろ、それが可能であったのは、ひとのみち教団の教理の特性が関連している。その特性は、日常倫理を説いた点にあり、教義も、現実生活における実践倫理に終始し、体系化された形而上学的な宇宙論は存在しなかった。これらの諸点が、同じ教団から、宗教団体と修養団体が、ほぼ同時に発生した要因としてあげられるが、同時に、教義のうえでの差異もそれほど大きいものではない。実践倫理宏正会は、会の目的を大自然に通ずる人間生活の法則（倫理）をもとめて、正しい人間生活のすじみちを教え、実践するにあるとするが、この倫理とは、その時その生活に都合のよい規則ではなく、大自然を動かしている理法のうち、人の世界を支配する絶対生活律であるとされる⁴⁶⁾。ここに神という言葉はでてこないが、PL の神とは、全体であり宇宙で

46) 上廣栄治「あなたの実践倫理」社団法人実践倫理宏正会、1976年35頁。

あるとされるし、PL 処生訓は、宇宙の法則として、人間の幸、不幸を司る世界を開示するものとされ、両者の差異は、決定的なものではないと言えよう。又、PL における一種の祈りである遂断（しきり）とは、堅い決心をして、実行にはいる前に、必ず成し遂げることを誓うとともに神の加護を願う式とされ⁴⁷⁾、キリスト教等の祈りとは異なっていると言える。PL においては神に依るといっても、人間の側での努力の大切さが、常に強調され一つの特質となっている。これは神と人間が量の差であり質の差ではないという教義と関連していると言えよう。これらの諸要因により、同じひとのみち教団から、宗教団体と、修養団体がほぼ同時に発生することが、可能になったのである。

ついで、前記の問題と関連しているが、はたしてひとのみちと PL は、どれだけの類似点と相違点を有しているかが検討の課題としてあげられる。この問題は、PL のもつ一種のモダニズムとも関連して考察する必要があるように思われる。PL は、きわめてモダンな宗教であり、かつ宗教らしからぬ宗教であり、ひとのみちとの断絶は大きいとみなされる場合が、少なからずあるが、これは正確なものとはみなしがたいと言える。モダンな様相は、外面的表層的部分に限られ、教義の中心である、みおしえ、みしらせ、身代りの思想は、徳光教以来のもので、基本的には、なんら変わっていないと言える。又、宗教ではない、もしくは宗教と言わなければ、それでもかまわないという主張は、霊友会のインナートリップ路線等においてもみられるもので PL 独自のものではない。それは一つには、現代において新しい信者、とくに若い信者を獲得する際には、あまり宗教色を出さぬ方が効果的であるという現実的な配慮に基づくものと思われる。PL 会員中でも若い層を観察していると、このいわば表層的なモダンさ、娯楽的要素、強すぎない宗教色にひかれている者が、かなりいることはたしかである。しかしその反面では、生

47) 宗教法人パーフェクトリバティー教団「PL 会員必携」53頁。

存の根底にかかわるような問題が生じた場合に、大きな効果を発揮するのは徳光教以来の教義であると言えよう。PL の教勢は、両者のたくみな使いわけによって保たれてきたとってさしつかえないと思われる。

ところで、マックファーランドは、PL 教団を、「贅沢な美を楽しむこと高度な宗教的完成としての『優雅な生活』を楽しむことに価値を置く快楽主義運動である。」⁴⁸⁾としているが、これのみでは十分な本質規定とは言えないと思われる。PL は諸教に分類されており、キリスト教に関連があると思っている部外者も多いが、その本質は、真言密教の影響を受けた、両部神道であると言える。今日の PL の礼拝の作法における日象の式は、真言密教の影響がみられるが、各種の式典には、神道の影響が色濃くみうけられる。PL は、ある意味で、神道の現代的形態の一つを示しているとも言えよう。又、それは、ピールらによるポジティヴ、スインキングの主張⁴⁹⁾、すなわち神に依りつつ、消極的な生活方式を捨てて積極的な考え方を持つという提唱にも類似点を有していると言える。しかしなによりも PL を規定し特色づけているのは、日本の庶民階級、とくに商人層のもつ功利主義であるように筆者には考えられる。

いずれにしろ PL 会員の中に入って感じることは、自由で明るい雰囲気であると言える。そこには、実践倫理宏正会のような、はりつめた感じはまったくないし、霊友会におけるような重苦しさもなく、現世をいかに充実し楽しく生きるかという指向性が、うかがわれる。しかしそれは、現実のきびしさ、苦しさに向き、夢の世界に逃避せんとするのではなく、まさしくこの世を渡る処世の術を教え、指導していく教団なのである。そこには、日本人が長年に渡って持ち続けてきた、たくましさ、明るさ、現実主義が生きているように思われるのである。

48) マックファーランド「前掲書」、195頁。

49) ノーマン、Vピール相沢勉訳「積極的な考え方の力」ダイヤモンド社1960年参照。